賣　り　桑

『今日は』とそろそろ軒の日除け當って居た夕日の色がめてかけて來た頃、泉屋との出た店からづつと勝手の方へはいって來た男があった。

のりは皆、表から裏へつき拔けられるやうに細い庭が出來て居る。だから大抵店と臺所の間にこゝらの人が一般に勝手と言って居る茶の間があって、一寸した用事の人は大抵其上りに腰をかけて話をする。

Ｓ町と言って東北も餘程南の方へ傾いて居り、に地圖を廣げて見ると、青森線の沿道に當ってぽっちりとした其名の町を見出すことが出來る。殆ど商家から成立って居る町で、何屋何屋、何屋の旦那何屋の娘と屋號ばかりで通って居て、ふとした時に何屋は何ていふ苗字でしたっけね、などと聞き合ふことが珍らしくない。學校へ行く子供でも、何屋の子とわかって居ないのは、の子としてれる連中か、しくは地方から入り込んだの子供に決って居る。借家の勞働者は別として、格子でも控へて金貸しをやって居るといふ家の外は、小さかれ大きかれ皆店を持って居る。近いところに半里と離れずに、此町を圍んで居る村々がなのだ。

さて今、泉屋の奥にはいって來た男は、

『よく續きやすなァ』とお天氣の挨拶をして、上り框に腰を下して股引の足を組んだ。

長火鉢の前に坐って居たの隠居は聞き耳をたてて、おは見馴れぬ村人なので一寸な顏をして居ると、

『あー堺屋さんから聞いて來やしたが、お宅には夏桑の賣るのがあるって話ですが……』

『はあ』と長く返事を引いて、おは今年もいよいよ時節が來たと思った。

つひ六七年の昔まで、商業の見習ひに出て息子が家に居なかった頃は、ではあるしするので店は出さずに置いた。その代り年々人頼みをしてはを飼って、か纏った金をへて居たが、息子が目出度奉公をすまして歸って、嫁も取り店も出し、何かと用も殖えたので、昔のやうに大仕掛けのも出來なくなった。けれども猶おは自分の手一つで出來る位のを飼って、それで絹を織っては末娘の晴着を染めたりして居たが、それも一通り揃ってからは、よる年ではあるしするので二三年この方はふっつりそれをやめて、その代りに桑を仕立てて年々それを賣るのを樂しみにして居る。

やのやうなものを少し作って、汁の實なぞも大方は八百屋の手を借りずにすんだ。桑の葉の芽ぐむ頃から夫婦はよくそれを樂しみにして語り合った。かうして買ひ手がちらちら見え出す頃になると、仲買ひの二三人も必ずやって來る。一貫目といふのと、畑ならばといふのがあって、貫目は日に日に値の上り下りはあれ、相場が決って居るから大抵間違ひがないけれども、畑となると賣り手買ひ手の見積りが違って、お互に高く賣りたい安く買ひたいでなかなか相談が纏らない。やうやう折れ合って手を打ったところで、仲買ひにしろ直接買ひにしろ、手金のかを置いていそいそと歸って行く。蠶の精がよくて桑がぽんぽん賣れる時には、午前と午後で一貫目で二三錢も違って來る。さうして畑の隅に風除けに置かれた立て通しのい葉までが飛ぶやうに賣れてしまふ、また續きで蠶の成長が思はしくなく、遣り切れなくなってでも捨てた此處でも捨てたといふ聲を聞くと、約束濟みの桑までが手金流れとなって、いつまでも繁り合った葉が畑に殘されることも珍らしくない。泉屋に限らず店のある家で桑畑を持って居るのが可なりあるので、何家はもうと約束が濟んだ、何屋の桑は全部賣れてしまったなどと、仲買ひの常として方々へ行っては其家の氣をませて安く買はうとする。尤も殘ったら最後一年中の手入れがふいになってしまふのだから、賣り手の方でもうっかりしては居られないのだ。

盆前ではあり町中はなんとなく活氣がたつのは此頃である。

泉屋の末娘のお豊は此節お針をやすんで居る。何ややとしく、手金のを書いたの計算やらをやらせられて、また小僧が店の用でしくて手が離せない時なぞ、おと一緒に畑に出て桑摘む女を見たりした。

明日の朝七時までに幾々貫目を摘んでくれと宵のうちに仲買ひのところから通知があると、小僧はいつも提灯をつけて裏長屋の女達を頼みにやられた。土方や日雇人のが、絲を取る前の朝仕事に、子供を連れ籠を背負って喜んでやって來る。

僅かばかりの手間を爭って、女どもはたわいのない話をしてに笑ひながら、淫らな唄をうたったり、泣き出す子供を叱りつけたり、わさわさと緑の葉を動かしては繁りに繁ったの中にはいって行く。

お豊は其間に、叢を分けて苺の赤い實を尋ねたり、畑の隅にを見出して喜んだりして居る。

筵の上にの守をしながら握飯を喰べて居た子供が、やがてを放ったらかして遊びに出かけるのを、め！　と追ひかけて行って、いきなり頭を叩いて泣かせる母親や、口から泡を飛ばしながら隣りの夫婦の惡口を語って聞かせる女。

むしむしと葉を摘む音が暫く續くと、の方を見廻りに行ったおが戻って來て、

『もう大概出來たかもしれないから、、そろそろやめてもよからうぞい』と聲をかける。

　それから猶二三分はむしむしする音が聞えて居るが、そのうちに買ひ主の姿も見え、おがを持ち出すと、それぞれ畝の間に置いた自分の籠を抱へ出して來る。

『さあ片っぱしから』と買ひの男がきたてると、

『さァさァ』とおもを持って立って居る。

『五貫八百？』と最初の聲が起ると、

『五貫八百』

『五貫八百』と順々に聲がうつって行く。

『お米さんかい、五貫八百……随分摘んだない貴女』

『五貫五百！』

『五貫二百！』

『そら次々！』

『六貫――六貫一百！』

『ほう！　誰だい誰だい』

『隣りの小母さァ、、も早くけて貰いなんしょよ』

『五貫！』

『五貫七百五十？』

　お豊は頻りに鉛筆をめて呼びあげる貫目を一々手帳にす。各々が摘んだ貫目をに書きつけたのを貰って、は畑のあちこちに散れて居た。子供を呼び集めて歸って行く。空籠のを入れて背負って行く女もあった。畑の隅に草を折り敷いて算盤を彈いて居た仲買ひと村人が、勢ひよく手を打ったと思ふとやをらちあがって、漆の樹につないで置いた馬を曳きよせる。まだ露の乾き切らぬ葉を筵に締めての背に積みあげると、馬は心得てとつとつと歩き出すのを、どうどうと止めて置いて、

『それぢやァ半金だけ茲であげて置きやす。殘金は全部受渡しが濟んでからのことと、ね、ようごせう、多分の朝までに取りに來ようと思ひやすから』と赤く焼けた胸元をはだけて、首から掛けた財布の紐をくるくると解き、くちゃのの幾枚かを渡してから、叢の中に投げて置いた笠を拾いあげてを取る。仲買ひが猶殘りの畑の相談をおに持ちかけて居るところへ、

『お天氣！』とぎしぎし通りかけたのは、近くの農家から桃を買ひ出して來るりである。二つの籠に滿ちた其鮮かな色を見ると、に欲しくなってお豊はいつも桃賣りの男を草の道にした。と、かくして日はおひおひにぢりぢりと光りの強さを増して來るのである。

　れるのを恐れて大抵桑摘みは朝のうちか夕方かに決って居た。摘み賃を渡さなければならないので、泉屋は夕方は小錢を數へる音と我先に爭ふ女達の聲がしかった。此時はお豊が小學校で習ったがよく役に立った。

　おとお豊の間に其樣なしい日が續くうちに、町のうちは日に日にぞよめいて來て、荒物店の軒には青や赤でった盆提灯が下がる。

　に供える爲めの、やや、そのやうな細かなものまで揃へられると、佛を祭る用意を整へるために出て來る村人が、十時時分から三時頃までの間に殆ど町に一ぱいとなる。負けろと値切る聲、負からぬといふ小僧、慾深く客を呼び込む聲や、出て行く客を負けるからと大聲で呼び返へす主人もある。値切るものは掛け値をするものと定って居る弊害で、僅かばかりの賣り買ひにも甚だしく骨が折れる。

　年の暮と盆前とは商家にとっては最もしい時である。

　勝手では中元の贈り物の遣り取り、お寺への勤めもあれば、お墓に燈籠をたてて花を挿さなければならず、召使ひどもに仕着せの浴衣も縫はなければならぬ。

　お豊は畑に出て歸ってはせっせとよく針を運ばした。座敷まで手に取るやうに聞える町のに耳を貸しながら、つひうつらうつらとなりかけてははっとして針を持ち直した。

　人の日か自分の日かわからぬやうな日が二三日續く。

　併し間違ひもなくは來た。

先祖へのお參りもすましてから、まづ一息とほっとした時に、お豊はから纏った小使ひと、賣り桑ののうちからとて日頃望んで居た羽二重の帶皮を買ふことを許された。

　糊の硬い浴衣を出して、心静に風呂につかって居ると、いづくともなく人の心をそゝるやうな盆踊りの太鼓が響く。

底本：「水野仙子全集」第二巻

初出：「女子文壇」明治四十三年八月

テキスト入力：小林　徹

公開：平成二十九年五月二十一日

リンク：[水野仙子ホームページ](http://carlschuricht.com/Senko/senko.htm)